り、私が先に宝永地震で書きうつした様式で刊行されることがのぞましい。そうすることによって、資料の価値は格段に飛躍するだろう。

（平成元年十一月三日記）

（杵築市文化財調査委員）

「立神」と海上交通

後藤　重巳

田端義夫のリバイバルで知られる「島育ち」と題する歌謡曲のなかの一節に、「沖の立神、また片瀬波」と云う部分がある。この「立神」は西九州から薩南諸島・沖縄の海岸部に広く分布するある一定の条件を備えた岩や小山に対する一般名詞である。

一方、地図を開いて丹念に眺めていると、内海を含めて日本列島の各地の海岸線に、「姫島」・「祝島」などと呼ぶ島名を持つ島が多く分布していることに気づく。「平家納経」で知られる安芸の宮島は、正式には「厳島」と呼ばれるが、これは本来「斉の島」であり、「神を祀った島」の意に起源を持っている。豊後国国東半島先端に位置する「姫島」は、『日本書紀』の「比売古曽神」の鎮座した話で知られる。

さて、私の知っている「立神」の北限は、アメリカ軍艦の入港でいつも問題をかもす、佐世保港の岸壁「立神」である。「立神」の名称の詳細な分布については、事改めて調べたことはないが、長崎以南の海岸線、特に鹿児島県域に入ると多くなる様である。

天保年間に、野本兼柄によって編纂された薩・隅・日三国の地誌『三国名勝図会』には、海岸風景の多くのスケッチが見られるが、それらのなか、各所に「立神」が記録されている。面白いことは、この『三国図会』の中で、兼柄は、薩摩半島先端の開聞岳に鎮座する「枚聞神社」の御祭神を「猿田彦」としている。周知のように「猿田彦」は、道案内の神として知られている。開聞岳は薩摩半島の先端に位置し、薩南諸島から本土に近付く航行船の絶好の目標、つまり「灯台」の役目を果たしていたのである。

「立神」の名で、人口に膾炙されているものに、鹿児島県大島郡名瀬市の名瀬湾入口の「立神」がある。これは、名瀬湾の湾口に屹立する大岩であり、考え方によって誠に迷惑な存在である。事実、余り広くもない名瀬湾の入口に立ちはだかるこの岩山は爆破して取り除く方が、この港の入船・出船にとって、確かに合理的かも知れない。

しかし、この海中の岩山は、取り除くことの出来ない大きな理由があった。この岩山が神の宿る場所だったからである。奄美の人々は、名瀬の港から船出をする時は、先ずこの「立神」に航海の安全を祈り、無事に帰港すると「立神」に感謝の意を捧げた。このような「立神」は、奄美諸島の海岸線の各地に散在し、島の人々の敬虔な信仰の対象となっている。海中の人の住めない小さな島は、神ばかりが住む島として崇められてき「沖の島」の信仰は、その最たるものであろう。

航海技術の未発達の時代、若しくは新しい時代においても、小舟による海上航行では、「磯伝い」や、陸が見え隠れする程度の沖を航行するのが、一般の航法であった。その折、小さな入江や浦は、重要な「泊」となり、海上に突き出た半島は、航行上の目印つまり「灯台」の役目を果たしたのである。半島の先端が「崎」・「先」であるが、そこは、神の宿る所と信ぜられ、「御」の字を付けて「御崎」となり、「岬」（みさき）の用法が生まれたものと考えられる。つまり「敬語」の付された地名と考えてよかろう。出雲の「日ノ御崎」信仰などは、この例として、つとに知られるところであろう。沖縄では、海上神の信仰として、「波の上宮」が知られている。

私の体験では、奄美大島から鹿児島に向う船上で、一番はじめに、水平線上に陸地の姿を見せたのは、開聞岳の山頂であった。南九州の各地に散在する「立神」は、必ずしも付近で最も高い山とは限らない。低くても、その山相が奇怪であったり、岩の姿が異常である場合が多く、まさに「神」が宿るにふさわしい条件を備えている。古人の「聖地」の設定条件は厳しかったのである。

小型船も優秀な通信設備を備え、安全航行が保証される時代になったが、薩南の島々における「立神」の信仰は、恐らくこれからも永く続けられることであろう。

古くから「沖は磯付」とはいわれるけれども、海上は、他人に気兼ねのいらない「公道」であった。この「おおやけみち」での安寧は、皆して祈られた。今少し、「立神」に関して祈られた。今少し、「立神」に関したいと考えている。

（文学部教授）